

邦家のため痛惜至極

中山秀三郎

東大名譽教授 中山博士は胃腸病のため、日下西片町の自邸でひたすら静養に努められてゐるが、程近い大學へ丈は時々出掛けられるとの事である。仙石博士の逝去に對しては邦家の爲痛惜至極として、學生時代の古い記憶を次の如く御傳へ下さつた。(記者)

仙石博士に初めて御目にかかりたるは博士が日本鐵道會社の建設にて宇都宮に御在勤のときなり、時は明治十八年の春と記憶す、小生共は工部大學校學生にて同級生十名鐵道測量の實習の爲め宇都宮白河間の豫測に從事せむとするときなりし、博士は同區間を踏査し豫測の指導を與へむ爲め小生共を引率し、宇都官を發し、鬼怒川べりに聳ゆる羽黒山に登り、那須野原を一望し、之れを貫く要所を定め、山を下り野を横切り大田原に一泊せし一日間の貴き教訓なり。

學生時代の事とて今猶深き印象を残すものなり、其主なるものは

- (一) 吾々は元氣盛なりし爲め、出發早々徒らをしながら歩きたるを戒めて云はく、元氣を徒費するなけれ後に疲を生すべし。
(二) 頂高約五百米の羽黒山に登らんとするとき、一同は一氣に驅て登る如き歩調を取

りたるに、此の如きことは持続せずと叱られたり

(三) 山頂に達したるとき一同汗を生じ、上衣を脱せむとせしに、暫く息ひ汗の止むを待ち脱衣せざれば寒冑に罹るべしと注意せられたり。

(四) 那須野を横断中渴を感じたるものあり、湧水を飲まんとせしに適否を究めず飲用するは腹痛等を生ずることあり注意すべしと

(五) 大田原に約一里の處に於て、宿迄有志の徒步競走を提案し、博士自身も加はり、斯くして元氣持続の「テスト」を行ひたり。以上博士は當時年齢三十歳前後にて、鐵道界にては元氣者多く、其第一人と謂はれたる方なるも、學生を指導するに當りては如何に細心なるか、慈父も猶及ばざるものあるを覺へたり。投宿後は「トランプ」等にて夜を更かすを禁じ、早寝、早起、早發を命ぜをる、然るに宿にて朝飯の膳を出すを遅くると見るや、勢よく臺所に突進し、飯櫃を抱き來りて曰く、手を拍ち催促に度を重ねるより之が一番有効なりと、果して朝膳は速に運ばれたり。

仙石氏に對する追憶の一 片

橋本敬之

最早十餘年の昔と相成候、仙石博士が總裁として鐵道院に乗込まれ候際、時の財界世話業として名ありし小生親戚の或者が、若し希望ならば仙石君に話をしてやるから祕書になつてはどうかと言はれし事有之候が、當時仙石氏の名は怖いものと一緒に相響き居候まゝ眞平々々とて即座に相斷り候事有之候。

近年に至り會などにて時折御目にかかり、時に戯談口をきかるゝ博士を見て噂程怖い人でないと感する様に相成候へども、然し御話の中にも中々アマノジャクの處がありて、そう簡単に情實により動かさるゝ人でない事はよく相分り申候。

即ち現代名士の多數を占むる所謂オツボチュニストでない事丈は確かに候。